



官 刻 孝義錄 卷廿三

陸奥十三

口 9
1596
23

2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2

9
1596
23



孝義錄卷之二十三

陸奥國十二

孝行者治郎八

若松の城下弘長寺の塔をかうとと来たる治郎八とある
者つともう死り父母に孝あつて用の起ひまつて
ゆくせば家貰へられて十二のまゝり本郷町越
後金沢次郎といへる者ありとく奉として十九歳の
やとぬるやうみつと先へうまへようたまことかう
順ふとやく世のうちう道遠せとあらわしとせ
かときくはとさかとくもせくむとくめにえう

主人よりうけたまふとおもて酒肴とごのへに就く
をくらべ又邊りの老因へはとりれどよりまつて酒
肴出でる事なしらむ時もそのときよりはまつて
あふぐぬとのきう出次第を料そへ親りありとす
とくの常じ様うしきの異うれ味あひと文也を
足後も主へかまうて絶えまつてわまますくへ
あつてかく青庵うのりを落とすとくせんへ
女はむ生とてとくぬれうて朝夕の寛せりみよも
さくはまくらうちまされば次席へも仕へと在りあ
家にゆく六三と變ふうて中庭と放ひあつま事

ものよ身もよからまつておもてらうよ又見のゆ
次席もくわくへひとうく疾火の病痛もくわくひを
いづかくはりとつれさまくも又おもえしゆもく
ゆくおもむくはる人のえりももたくまくへげあ
三人の病者次席へもくわくあつておもてくまく
まくもくへきとて薦神とらどもくまくとくとくの
利をりて明日の食よあくらうておもれとまざら
まく机やとくとくへきとくあおのうらとくとくに
せと賃はまるとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくに酒類の日節もなほよしもあつても酒
をやくかく觀の茶は駄子うかとひうじとひれ
つれすれとまづと云ふとひ出小枝をどうもひ
まともう文母うへ、あ豪とあきしらむとのと
ウタ内樂こやうをまくろも事無されどそひ
の食せばよとまゆるて二親兄の安否とまへ食
事のをまくとまづとまづとまづとまづとまづ
やれて氣短くたうともちうともちうともちうとも
泣くへと志くはまくはまくはまくはまくはまく
まくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
まくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

にまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
やうはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
せうはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
せうはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
せうはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
せうはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

奇特者棚本吉之助
棚本吉之助は兵部大輔城下豊町の檢断たつと生れつと
家主あへて上田まへりつゝ代民を構え因の作
法をつね乃まく家業自身をゆゑむがもれり
りのあつこしきとまくは人に妻へとまくは

此小生の如きを称す處中よりひづておひよ
く商素に意ば用の忠孝のりおあれへ往々小作
へ文年つゝして職業すむ者れどもその父
兄乃つまうらあはうと棚木のわうじをねうぶ
せんとあつこつはまかたゆく種やつしむ
ひかえめのれ老とおもとみうかく小作と
あうが半歳へいきへ免てに至て行跡もそぞ
きは風俗とおなじりあはる世人感後もあ
はうれとくの賣死者多と町並とへ衆人の敵とそ
頗主よりおもふ事うれわへ終もよも

者に示しよとくかまく御意をとくら程小及ふ
てとどもかまくぬをくらぬ程めを我とと
あくせきくもれ高きまれとある後を極てと
あく後さうととくととくととくととくと
ある者よしととくととくととくととくと
高つととくととくととくととくととくと
自らちうりかこの炭とあ價値しきうちいか
いはく買入てきくへきれりとお價とおとと
りくともりととくととくととくととくと
ととくととくととくととくととくととくと

多かりきの程乃行跡にては倫理と曰ひまじめ
人を殺す事もあつてかゝれてあまらひに於て
乃貴酒をとおれまつりやくまゐ町にて理詮の上
げしむるふる若き湯うかくして判斷とうも
少き感服してあがての歎仰とうりてゆる
其事へも見中多く苦母にあつく仕へ自用の體
はしきとみたゞへつまくとくにその衣食
をつまらぬむとてはせりとくに種のせ
かわづともとくにまつらぬうらの者アセよて
老をうやあくよりまつら町の中の者ともそく

睦へまは他日もかまひむらひなまともも年もよつて
もすくらしと若き湯うかくしてあまくいとあまくいと年
かうこかぬとくにとくにとくにとくにとくに天明元
年小つてかくふきの若らくもく世人のくみとも
ちかへどとて頃まで終へまつてよきとて年ばあ
あくく嘗せざとか

忠孝者倉吉郎

倉太郎ハ耶麻於方六天村の百姓として父と文八弟と
の庵の家主はしまれめまことに因郡沖村の民忠太
清つうかく小ちとて先の賀券をもつて小生れ

ほと實直たうる者多く年頃田畠ひつて先志うらを
うなまうりの年うもううつう券書とおうじうをうそ
はぐく使くかう志在馬、親もすく妹うううを
と外よよううせん人手もたず費用も多うてふをう
けうと食ち節白夜よかとあくと六月のひと秋まゆ
て早苗う水うねうれうめのうもりよ和をうる
あまがひを房せうううにうきて薦あれどよま
う小代ううううれう老とそくをうけてくぬ
ア家の業を人生うううは日忙も怠りと親く
きあらかふへ秋の収口うれう年みとられと

ますけよをしきむに主のすく付ふうあく例の洗
濯の暇うせととと一日二日とるとととあくても田
畠のほとととととと公納のまと馬小かよせく追ゆく
あとと力の及ぬやとと背むを數えの田を耕せども村の
中地者もとととれをかえりつゝうううくに
睦へ隣里もとととれをかえりつゝうううくに
くととれ父の病多く窮苦にせよととととととと
もうかの代金ばかりと公納をくくくは父文八帝
六十九乃至うと志氣とうやと秋よりとては疫病を
病むくらうううと食ち節夜あくかうひあ飲食

ちよに心地よくあそ一日の料をあうけ立てかゆう
あつち小市まゝ日朴糸すと駆くしきはもみれ
あともとひとせと我を病める親のいぬて因細り
身を下すゆせばうふ怪じとそとけめぞせらる
夜ぬく私をく田のるすこどりうきと年くう
公納そくまうしのうかの代金にうりんぐ今も賄
ふあそをつたもすと父やうのくわをとくせく
我かとく公納くゆくられへふまふも落ひそとせ
懲先ける父の衣代洗もくれをとくわくも衣と
かへ被せく家をうれせびれいとぬよつくうひま

ちようとくのよをく父の病みゆさればまくらるる
もらうんあうはとくまくゆれ経じ経く主の益ひ業ほ
と先あ夜小ひとまほくまくにむつまくひとと
ゆんちよよをせざくり病者の外のあらざるゆ
ともくにとく人心力をとめて書ひつゝ恨そらう
て終日うきたな倉古節うく主につづく母は幼
きあつとく妹ち人のぬいとおうふはまくらさんくも
あく父一人のねされといひとをふつまさる経に身
うけとくくさの百姓の數よりうんとらしく甲斐も
かくちよくねう事よそれとまれをきけよくと夜ふく

まわる事なく、あたみをこれにすへまつてあま
らさんと決まつて、三月乃
つまえを思ひ、親孝行を感、代六あま
くにすきの賃券とするかくの百姓よまえ
らせけり。新日農支にまつては農興支食も
ゆきまことにまつては年十二石よりま
まのちと耕を身とすと主人患在甚もまへ寔
義夫は忠てひづれあるあれ終生と於がんすと
而と農事日々とまへ公納は處を年々く困窮の

兵小半金あたぐひとうへりとくまつ事消りても
かうもえちくさるきこ十八石九斗六石うちせんね
まれとちよちゆう條りにまともんじゆんと人と隣じゆん
すく一村小睡く近里にまくまくよふをすく
身ともゆふやくまわわけまくまく天ぬ先年
領主復次うて食古郎にまどを移社食よ穀を
あめねねえもととむと加へりく忠右衛門とまど

孝行者文次席

若志北城下駄通寺町日文次郎と火あかりぬあうつ

病ノ箱子と見てやうにせばこれ丈をあ走
とも年後支病たりハ船内賀子と云ふと云もく
す先き父の病を負ふてモ免とてはく温泉乃
山ゆく車のうへ行ともち遠ひよ出でと云とあひ人
足立ちるをあたして家にへりと是時すすき
文次弟をうきうきと酒とおけとへえとさ
手うきかねるかとあくあくあくへもくとて
アたやうりけり五年あるまほは病ふつ
まうくまうけと醫業ありと先師伝乃形と

ちく夜じうのまうら事多く母の病のすれうきの
竹子にあのは童の踊りかくらむり説くとちづる、
あやこがると歌と行つるもあらざるゝと云
文次弟の姉乃がう町日あらとうむくの夜門をに
つる童の踊りまみれとえうひて安せむる
わざとゆく姉乃の甲斐となくゆせられハ庭まうら
よき花とよしのまへのまへ始く朝夕はれりけり文次弟
もまたまたのひ重じゆめりと伯父の力とより
病やくまく育ゆとぞと云ふ科を考教るより

しにひらくとどき一人の用ともかまひ親ともかう
湯をよろて老と告ぬ後とやうて歸り去る年始ひく
財をわざくそのはよ起く神佛ももうてくのを
壹させの業をゆゑむ夜その病とまもけあふれ
と家にえりてゐる父と母そらし天明二年領主
とうまばらしく寝あさる

奇特者布左衛門

耶麻殿栗生沢村は高十六石あまりある百姓市左衛
門よりひめうそん志人よもぐれ公納をりとくうり
くち役まく済る事まく一村の者とも睦しくうれ

安永四月よりはなむとひやくとめ日へ百姓のうちに
支念ふとくうやじりのあくと貯へをなむ教養
とくらぐて多難を多くもあり又は村をうち津井
隣ア自守川の東よりて洪流が来たるのとくもた
え公私内用通へかく自守のうち天井沢村うち
より山送りをとあるときたくもへりやう
るにせきの化きあく人のかひもやもくんどおと
村ありすとおもむことうかとりあへ百七十人の人夫を
やもく木金の費ひ多くとのと一人ぬくとひども深
村のりひと百十人の夫が生れてあれとまづけん

千百八十間余乃道をあらたにほくと出で牛馬乃
往來すまづ小二村の人民など金をもろしする所
がふくわざ市左衛門數多の錢をもせよよよよ
とく天の二年領主うり社會をもれんとく北畠
出へるあらとば賣せり

奇物考園汎丹ニ席

冥汎丹ニ席ハ耶麻忍夷田新田村の肝煎役者ニ十八石
余の高持なり年々くして親乃うりとどめはとだ
己う代とあうてはあとに小よばう金もじはくの控
えどもくみ事あらわつてくそむく其法よそむく

半弓初とけうと父母せりよゆせくもあり
もきくふくかうけ父乃てよ疾と死んでおくよ
おうとあとと醫とまくと薬をうと先端下とと薬
うふ家みととけいせたつねゆとくゆとくち
ゆ故里アモトウリとせと先とお安否ととくわにやれ
あれとじつまくとくらうととく農業のつと先も
あまむかと教とて二人あつてうらそれととくへ石井
さんまのまとゆうておちのあくとくちやつぐん
とくは頗ひまよつてくらむとまむと暮ひよ

あらえて未へよりれまつてもそひにびとえまひまぢや
かわくやうり丹と算ことあもとより物がくるとよく
し算術をとく小者へあ一村よ隠とも割符ね又を
きゆくわお納め事大蔵金をせくは村乃うちの人
衆ひさすまくを改めとくふりのくじにて年割り
奉役をとられをばむと私みく力せやくもまく
けよ書をよじるとぬと古人せよん言行とおもく
人よとよもとまくは私の日待のけと觀へとくらうと
集まく事用へお宿どとよもぬとくまくのまよとく
をよりぬとくとく農事とほとせん人すも

奇特者六助

孝行者まつ

とくへ爲あれとそひすやうふと身まこと爲う
て人をうやまひ吉凶の禮かまうへとを近とりま
せみの徳アラかつとぞり天明二年日暮更ぞうて以至
うりまをとくとくせよも
奇特者六助
孝行者さち
孝行者まつ
六助と耶麻那、剣全安村の民ちうむかとうり実義
生れつゝもく親うりとよくつゝ家うち睡へもわ
あらそよむなくまの眞と純儀の類まく人にも

もあつてつけぬじと日が限とあて候行舟を
あらじよと定むる数のああれうひと人を
先るとお食の有なしゆゑをやく坐候乃
事とはうち或ら含糧乞ふはと貰まの事は
おもひきとく候まうふとでもあへばう候よ
ふ中に六賜へあへりけむとアして返さ
ぬおのゆつて役人のかどにほか事あとあらよ
人より先にゆきておみじひとく人吏とまゝ又を
村までよしむはくもかと重病とまづはしく迷ひ
往へ山野比縫は出ても人に多くあくたとまく乞弱

乃考とよきもともうなだけつゝ人多く感へ候
事の親れせりあつて程々家内うち七八人多く十九石
あゆの高をとおく公納徳役はとくとくまく
をあつ不幸のゆあつと人を多くあくたつも
いふもとも親れくと田とすとあまくとくとく
お高の田と一族よりもひとり十石り算りと耕
く二人の娘を抱かずあれハ姉娘は嫁にてりて
にとれ日とよむむむわとあるとお算もとまづはして
お行なせんとまくと二人の娘をすまつて

卷之三

卷

さうに此後ども父アズム孝とそく村の中を
まわるうちひいきり父おとおい無くゆけ
是度田畠のむ、ち二入してつま先に主見附を
父ちあひゆるわ、清酒とまくら父の涼田をうけ
は俄日風すとまくらとハ二入のすら畠よみくらを
田よ入ら父よかう山よ入くも又に主見とまく
弟久馬よわくとがくとくまく父乃もとまくは
まく六衣服を洋とまくも父にまくとまくは
はくとまくとまくも父にまくとまくは
あたう日々食すも父より生まくつて馬とも

てまことに父の心はちひりてゐる
こそ在せらるゝに之人の志也小まきあくと天明
三季頃至らる六助と二人共娘よめとあくと寝

奇物志
卷之三

若松の城下南町の方より北府兼役つゝむろ寺内
新左衛門、六十九石余をも持主う領主ひまはせ
封せらきと改められより代々將軍を勤めすく乃
民日程（く）田畠の事にとまづて御支食乞ふを考
えゆきうちくにまつたひくかくきくふくまくま

用あつまらさんと金は那兩面村乃へ纏まつて元二里
をかづめあれども成日は地より水と水と水
雨とすれせれとあくわうつゝ多く此民乃へ
ゆくにあらんれど民もまことに業よた
むとまじい股へうつ又左腰へうつ百姓乃へ
そくさきを空へまかね地あまくと新左衛つ
そくひく今ある民乃お高のうちへこたりに庵
そくたう所と生してそくじる所と地と居る
して文礼はせられりやもまことあらゆ
まよていつきりぬを先づましんしふよそぬ

奉と領主にあらゆふとぬまつてもうかとよらぬ
地からたら者をれあらうに地をほりつまうらん
志と持高多くかうへむ御人は新左衛う功ま
と松ひきと領主も久く廢とまじ地とおへく
又は南町乃きと細ち數あくと田のことをとほのち
細地をもくまうとあとより父母は孝忠あらく
中もとあがめく病てとれに絶世とまじくまう者
あらうつねあらうとあとより父母は孝忠あらく
やくせのへを感へうつ男まへんらまへまか

新左衛門は行とりをひきとつての内をう
と睡へ下つての夜半を起るよほぐく
ままでりとまめとひづかくとくふくと
つもつて行とるどりとくにんうりうらう
ひうらを新左衛門がまつてをねつまもむこ
とまくとあせあわとまくちつて北民ともくをす
林くわくわくまんじくらやと領主とおへすんせ
人もいふあくと新左衛門もつまくもくもく
アーノモモキアキモモモモモモモモモモ
西よかくと用木の川筋うけまつ田をまつ不用の
あとらまく

もそへとひくれ村へまくとあくと新左
衛門がひて人夫とつとせとくとしられいまが行
かねざるもくとまくけくと年数多くとくとく
屋うみ領主にまよて天明二年寝若くとくとく
あとらまく

貞節者とは

えりと耶麻忍利根川村の行とる見え次もくもく
在りてりとまよふと布流村の民全右衛門伯母
まよてあくとまよて十六年もくまくはまくおこまと
男比とよくと姑とせふあつてまのうられの女入主

公酒清らるりにてせんとあく姑一人とみてゆ
ふと人をもが身を人にうつて勤めしときは、あつま
るくれどもうの甲斐もよび八十もあつたとす
まほはあづ郡熊谷村の鶴々斎臺田の又年號
すくすくあきこまくさむをうらやまう全角六
病の中北難貴キムアシタタクニ使ひ方代
うもく候ひそくすれゐ一人の因数の額村乃
民苦へうかくよそくうあざむ多病よるつてやつ
えもあうけるどもあれう身代と僕ひそんの
心あつゝこと左半あはとくとくわくわくひすや

かの主人若八はよしやうとおふとあらりあ
あとあくれ勤もじあせあうあれも身の代へがく
くそと志づくゆかてんをうと鳥を鳴りく
後日そのわくとさくあんとゆうアカとゆくも
病の療治とちをう甲斐うて七日あよちもえ
化せううとそれう身の代をとすれ身がく身をもひ
もくく若八うりとすりうけくよせまく若八うくう
はう六年うかと忘うなくまほは人あくと腰今う
主人久次うかと忘うなくまほは人あくと腰今う
かとくすのあくうたふたもあるを船内につれ

そひ若もくわくわくうつて因してこもくとねあくとあ
事もくねてたく農事ともやむ耕作に出でる
や人の風ふうを多く田畠の隙すきをすりられ
ゆき私憂とあらわく、ひまうせりもよめ業す
あらわきりとうと始に孝吉あく反對れをを
らぬうなづく又うぬりとせんじて原生あ薪をせ
ア始のりえ被うり病るとさあは主人と人代
と生て始わりとふりうて病をも始うくあると
財を葬つてあけくつるをも費うりとくに公納
の事うともまよの身をもよりうけくつるを

里中は史八とゆ時又のうとうと定光と人内
きのうと始の志ももどうぞにあらんとあらけ
うし始をうても節義をぢりすゑて二十年の
程くこち小石やはくとあ今乃主人とくと
あきて身の代が贋を殺をくちようと、ハ今もそ
のうとくとくと身とは主人とくとくと暇半
物の金を築つゝかくかくと身をあくせとよを
全くのふもとよもよもんうむりとくとくとよ
つくとくとくあれうせ人の境ととあるへととあ
天明二年領主へ仰るよりれあつてまどくせうと

忠孝者植翁

權翁も耶麻忍等田村乃良ちう家畜して十石
まつう牛とう牛を人につれて十石にて又日々
持るの田を耕しておは同郡上田村も後乃
丈とむへく儀三翁とひへう植翁家より附くと
とお父のとく親もあとて儀三翁を用くあれども
事生じておれかくちうき植翁二十日の年に曰郡
熊余村より妻ひぐて娘一人かくしハまくよ妻
ふうり小病痛とてとくとくに植翁つと先の娘子
者もせう終ふひうくあらぬとぞとくますく

記すと安永九年年四月清治農村の百姓各
七席うち小坐を候奉につとくつへく人とすりま
だり一村のまつて親を抱めまひきとせくと
ふくと主人も年季の定とあらそりてほんと
若七席ハ高さうく小十二石余りあり民それも農
事忙ひぬよ深地乃様をつくとおもたうれまを
植翁農業年少成つて嘗て消へばも田畠とえびく
川乃塵埃を流つておもとおもと入のよきと
主財を失ひて又おもと田野より多く人を曰く

二度前もとより控籠を一疋とも五月乃て後單うち
はくまもと秋あくもれけ引て主人のつひづらと
坐としもと無く主家へるりとすうとこくすばあく
すき皮とのつむちをひもえくかく次一候うち
農事すとくもくのとてうれをすけよりとやくを
せきつと先もとと自他乃庵にてかうしどとぬと
やうれ槿苑う吉父儀吉瀬へ去る年秋中風流
氣も多と多病ふたりりぬゆくをゆくをぬ
もあらはるは人のわざいとぬとうがひくうくう
かくううに薪う木もく人とあらはるかくのりぬ

経りんとつよ例乃やまと日ゆう次もとあれは志そく
多親乃すとふとゆう脅と看病の扱ひをのせよと
ヨリヨリカとゆく山腹を行く薪多くとくとくの夜半
ぬくとくゆうとくの田畠とえくとくとくとくと
人のほとをかく事たりも向とめう葉ひとくとくけ
と夜すく行て來り病者比とくもとくおあれハ夜半
に来後つづく市よりあゆひそくしろたすとくとく
のそと主人のりと佛事令舍式もとく祭礼もとあつて
調業もとくはようどくのあらうらとくか
味をひらて二親のりとふとくをとあは主人もとく

志をあさきにわざまくにそひをれもうとこひくお
がもう親の年くじ代貢ね小割後すとつすも
已う身代の全りてそひをせむのひとをもとめ人を
そひをかくとてそれと後多傷の老をハマシモたるうへ
其病のゆふう生れもとせむれ書うつを夜ぬと又ハ若こ
と小かくて活活袋乃村より鷺田村までハ一里半を
あるへまはれ雷火と急に波打つて行波ぬるよ
ゆうき家の用をうへ事へたゞくと一日を度むじよ
せんと至せア變もあくことあるまで二月半をくよ
とぬまをもとやうひえをとくの言れ身の代金乃

うちもとそがうま人年うも金とひかりを華春乃
料とそがく死くあは母一人に生うと病よそへぬそり
とねきい屋うしんをもとへれむ日生くと後の娘日
ゆうと多食れ度新まで御へ金とあゆうの里人曰
女入組をひりぬとまづて事にひつもほりう
もつたらまくとあひふとくまくとひねくとひ
金をねどそれ着うりとそくも田乃るた石あまうち
ソシヒテソリ教田とひわうて田れ貢ねとひ
けく者うくと出く光のまく後役を身の代とも
あは候ひま親の病は金とあくとせんと代券書と

かひきとまほの舊より年々とと改り四歳の全代身
内代と生れとつは主人もつとをとてがまの代内
全まくにうてとあると賄ふへまうのとと是れ
さざんよどむと語人またハ一村の勞とあらは
ゑくとと身の食も給ひたゞせありまれはまくの身
とて看病のととをのまくと妻もたくすとあ
まは殺されよしもへくちくま不活の法と見えアリ
て身代の全まくとをあくとせととキムシムとあ
りと白姓ふくと妻とじくと家ととまくと民戸
とと失ひと身代を免れ經へやうさんこソヌ特急も

涙を流してとひきわみの如く代兵ととあうとえびの
絆ととく死ぬやうとと不幸にして妻子ふりと
病小ぬとと妻のとと先手ととくもあくねととく
身代の全まくのとと見だすとととととととととと
農具の類のととととととととととととととととと
運びとととととととととととととととととととと
あくとととととととととととととととととととと
全室のうちとはハ償ひとととととととととと
身と勤めとあまうととととととととととととと
ととととととととととととととととととととと

民アリ之ノ所爲モ甚ハトモアリテハ天明ニ年齋父
ちも多莫ニシテ此モハ社金を乞ム凡そ板をもく
トスルノシ

孝行者全益

孝行者全益

若松ノ城下桂林寺町口全益ニシテ是アリ又ト全
ナ席トシテ象代内人モアリテ高ヒシテ
セトツドミタリ全ナ席ノレミ病癇ト於キモルモハ
走ルキナリシ事小モトクヘモ親族モトク全益
3月の最終席モ用ヒシトモトキナリ經ナリトシ

祖母と母と二人その衣を洗ひそぞ又ト裁縫ま
とて併せとて娘と子と日じアシテ全ナ席う席とた
モけ葉書を寫シテシテこの甲斐あくて十二年三月
うセぬナムシ得金義正前ノ小九葉あつゝ又代
毛とソリムナキちあん日本とシテ起シテ墓福ノ附
乃居少と又のむねを幕ヒシテモテ自らモモヒシテ
うシテ男はそしテ此憂切されんう父ノ向ノモニ
おも深めアリ祖母母ととに心よきもとくとくが
え見シテシテ量内またヨリ其錢をもあまう洗ミ
てようあまたの祖母と母の業をも底シヒシテの日

と送りてを稚ひやうりされや思ひもあらず
男不意すて父じとくと母を南にかよまてを
そひのよたとく南へとあはせむくハ竈の外と
あひて食事と御へと見んたりの童子も見え
あひて見ゆるをあらへとひへと御父よがつて女乃よ
きみのくを黒の人もみぬ志りきみく淡ふおまち
達りぬもかくは思ふめりも華うるれい
母のと室うらうるうるを始り便あつとくせふ
かくに尊をもとめのとせりゆるもゆるをもとへて

のを母はまよられふもとけあくまじひとえ
始小はまろまうれむ乃まくかくねとのま常は寝て
せ終ゆくゆくゆくゆく男とりも始のむすみとくふ
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
食療のよれあらうとなく後りまとも又男ゆく
つるみへどを金糸かく二十よりへとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
つる職業ともうへと毎次百八十業多く先づ油
手とあはれもとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷三

卷之三

あはれぬ事もあらずとまことに薦付されとほり
の去年の秋より紫とうふと竹葉子まきの油揚
を数をうちよそ雪風をうなぎ見る所を
もは異ある様ゆゑに新しさわいとくのへもく
親の二人がわづらうとくらうとくらうめ
がくらうとくらう鶴乃食とても母代くらう
うちよそまちく食とくらうとくらうとくらう
むりくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
ひりくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
おとくらうとくらうとくらうとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらうとくらうとくらう

孝行者龜治

あまくまく一々の後ともよきにあれば年もあら
どうう町のうちれおととを出んとすると終んこ
徳ふとくめしはまちひきふうふす傾きよりれ
まきてまく天明四年母子三人日を寝起とてまと
りてきすまく

内中よりおまかせをとせられまゝ伊豆守の事
はおまちあらへ老乃翁いつくまでも自生す
ほやひもむきとよ母と年先より
病ふるあ起らてけのゆくゆくも見れぬち
もと慈活アヘトドクタリとひ床うちもひりの
そとをひとすま事わひ
ああされどとく湯あともらうひ稚子とみちて
えくよと泣ひきよしめ芋とのませのうら食
とどり生あらへかととりまつと中まると父母
のこじ味乃おととくあめじてまを次ねん

某あとも先を出ぬ時は酒と壺に文うも
客うもまうう歎うぬは左毛りとくう人の全草
氣てのふもあく歎うの事うとじせれつとぬる
あれを病のうちふもあくばらわくとももむら
うちむまむと蟲治うひくしてもくよかと
しゆうくに利徳をひくかきとくと儀く
父の心をむらゆきをまち修業ゆくまされこゆく
ととすがくとくとくえ絆を今、祚徳をかくく令
おとくすといのれうとおせうめくとくとく
あたとふそくまくの石塚の親世音工はうて

浦く二親乃松力うぎすぬまううとかへり来る
事うとおもかくはくとく天明みまほ主に
せえぬきとまくあくとくお孝心とまく

忠義者市太郎

會津約涂川村の百姓新助う下男市左郎ハ力と虫治郡中
荒井村の民うつ十二年うとく貨券に男をうつて先
之くう人とすき淳直うがりぬく生家の勤うく
志うと白米とあくをアムモウト一蟲代内と
カヒトを里れあうと睡くつまくわもあくとく
やとやううきまんの家七人うち娘七人をとく村

ア様やくに至れり高よもて親の内うち小うす所と
市を出りかとまつてあらゆる病をひらうに病志のむすび
をもとげしは終日病をあらわすも比うとも親族
なりのを及ぶふ生れづらきもきも去年が夏度病行
まれて人で小ゆきが新助をもとめこもりく
をもとめ醫療をもとめ看病へ田畠のつと夫
きもとめの医政の事はすじつあるまで市太郎一人
のみよもとあくもとおそれ村うちきれ年乃
半うとまひよ経へしげは村の細のまこと葉園
のれとうとて公納のまもとをうるまうとせん

あくよをうそにて主料よへあつまひあきと帝太郎うか
と用うるによつて公納のまゝうらを補ひをみつゝ是
をもつゝまゝ人をもま志を感へまよせれえの代
全とゆゑして岐くらせりとの百姓ともうちれと
よ先の病のうきよの生とをもうもそ経ひよもと見
ちらに山湯よりお浴びまことにまきあつてうめも
ちうふと湯をうきゆうとお浴びまくはまくはまく
を後ハまゆをかくともかうめとつよま人ともまく
きの志の切きりにあくよ主にまよまゆのま湯を
て後を恨ともどもとお新物ハモニキもあまうりても百

姓うるうりとくを篤実あらがう者そて祖父の文をもとづら見る
の患き病よつても財産をもてて患き病も又資をあらね
名守せ申睡へくさづけに終くももの称美もとあつま
ふ者あつげて今的新助も全業せ銀風とててと成
まくともと隣ニニシキモトムテアリハナリ有
し小村の内代寄民よハヤシ小づけく施くらべて年か
どもとばく市太郎う志よりて身の代役券書とす
てくわざれぬくれ民とかきくらひをすくとくに天明
六年領主うつ寝坐うて主役のめだたすまことせく
まく

孝行者門太郎

門太郎ハ耶麻忍山源村の鶴々戸分ゆきむる十一石
み斗にあらめりて故民なり年みづきして父にとく
生じては頃母乃ち二十九よりはか日年嫁せ
ん事とくめ又ハ後の丈りとよかとよすの多か
くに母を貞節代志をそとめ二人の子とあつた
あらめたうつ右郎十二と乃とちうえれすと深く
あくともよきとく先づう終にゆくとまてお
ひくいふる廢経うくソノ移ひく父の西教不^レ似

かとひる人やうつゆ乃まはらとくへる
父もたゞもあ農事めとめ思ふまくまへ
大工の道をまひ小細工などしてせばよみを辛貧
諸役の神ひともあらへれどもそぞれとせむ
のつぶよくわくめくめくらもくれよせむ
あしげと母をまかとれはと今まにせむ
おぞの考ひのとくと感しすくあせめくま
おぬくとくわくまやううけうけう父の仕事と
る業が続てもまやれひやく十穴の年うりく大工の
と業とくひのとくとあつて後うごひま

民のほそひとまきは稼穡の年日あくと思ふ
あせめくとくとくとくとくとくとくとくとく
出く又はまきてゆき家産をまのめくとくとくとく
馬とめたあ、主公納の茶金がまくとくとく人吏の役も
済らぬよとて停る付と母のまちうりとくとく人
くとく酒などの物とくへりいふれとて酒の價とく
ゆき葉ふれ敷をく料く家はせりとくとくとくとく
靈若とせりとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

又あうるを、此處まことに醫師ある所へ因邪諸苗代
町の醫師は、事はちひなまに里外りの處
お一里あまうれ、峰山と坂のまゝをもつて
峯山と通じ、中身を三十日かくとて病工を
ともうけし、復おせよせひて病乃しあくら
かあうとあえり、業比駿とまくにいために病を
あきそくのむれ天の二年向六年八九月
の日烟乃とおア一粒もあうりしに縣城坐く
代官がゆい、あうれ山車坐ても領主より北東上
て一人まも渴令を及ぶまゝ、乞ふと

力欲もして農事とつむれよとあつとせうす
ひそかにまきをすくはりせんこあひ糸一粒
あうとも多く加へてゆにちくとひがひまく日も
家にあらわる太神の宮と先祖の靈廟はまく
つまむ飯とまくへますとひある母はまく先
ちつき去る年のれを代官うちまくまく称
くらはすと母じいとくとく退ふとくとく
事よりししま新猪苗代町より群けと魚
りとくゆく母アラミを父の靈廟と墓あは
まく人情のりぬと茶とみどりとさくらのく

あたはとしのとみよおふ一家もあくまでは
ひの日及て次御里よりのとを睦しくかきりじま
ひ乃事頃まじめとめて寝あらうて年どくせ
くハ天ぬ十日のゆなうを養

孝行者を勤次

か年次を令津殿も久村の百姓文吉（男）
つともうと父祖父母を教へ父母の教とすてよ
内つゆのりれす異きつとぬうてうれがひひ
て去ま會津へ詔音代靈場二十石とえらひじ
小病らふとよ懐姫の身よそくあらむとてむちも

そくあ丈日ひやうとつまうとく病かかくと
すく奠礼（とくままでせ十日）とまつてつま
とよおはつてお起て門を小坂難とくわゆく乃
佛祚を拂（は）きとう村の佐守代社半千うて又ち
寺地彦善薩としれマ母乃の母の（お）牛と称
う順礼（ゆき）出てと道中の難（おん）とおひが
にこうつてはきくう小差（おとこ）とおひが
乃うちにてくひと度（とく）もあつて（とく）事（こと）一
日をかく牛（おとこ）とおひがとおひがと
那塔寺村よりうしき八幡宮まことへ觀せまよと

是れと云ふのはもうあると云ふ事で、祖父母
がつぶさうてあつた國主はひち坂齋といひ寺
社小生のあはへどもよしと佛神のえむらうす
ひあへとくもひきこす徳又母の目とあるひ
きあそびもくらひてくじめ事に母比産より
其のあはりをうなうとおお次りいわく一考
のや長刀入ておやじくさうしてかよひゆき
めう産をよぢらひ付つておきとかねうす
某用の教子をうけ家乃うちせりめのひねうすと
まめ、自らおもてやあらまし、余ふのきみと

まめへと起きて乳をぬき生を一月やうのうふへ寝
あくびをまがつても母乃側はうせうそそ母比乳のも
まろとてつむねをもじりにゆき乳をとめまくらと痛と
やまめんまづ雅を支えもとて笑ひあくろともつとも
次第く毋のくら屋とうじんすとどひの重の歌を北
ひきと田畠乃はとくちた害ふきまじい村乃役人よひめ
むくはくまわぬとととせうやくわくまきう
天の子年領主うり寝あくまと竹よけう
まなととせう

せんとお治船持寺村乃民庄助う後輩なり老母を女
に奉とまく一家とりそくと富してそれととあつたる
所の食ねらをとく人びとりふ事もあつて此處にあつた
まゝ支の庄助もくろりて娘二人をのゝせけよ
曰村小まみゑ義湯とつゆりて夫婦ともふ先へて
二人の娘のむらきをめがれ多くさんと憐みされと
もよひとつてありしにまう子とゑ義湯うすくの蒲ふ
まゆうまゆうと玉能くと九石あやう比田さう
に一粒のみのこもあけきと渴令すと及よへう
くとほどのせくふくうて持持まとせくうは技

おまと月正とまうとれどく因教牛込村のままで六里
やと角くまつたる者の中ととくとますとかよひなう
走北せふあつて太沼郡瀛谷村日暮とううてつ
へつてかねて多病の男あつとてつとせうるるも
あらとがんくまつての法とえどくまつてのりとよ
ゆゑあまうつて先もとてつて帳ととて能もとは
男代の金の借ひく田畠のはどうあわせとくわ
てくもくじ力とよくせうとくまくわらひと
感くまくじとくまくじとくまくじとくまくじと
とくまくじとくまくじとくまくじとくまくじと

うせぬる頃一村あらへ度病行ひを所善
そく先せしと全集の民家も廢へとてはくふ
數立せよか一人も病めせくありてはくしての
家の病とますけまともひ令とくわくくされ
散在したるもくらむがまをつぐへと
と謝せうるうち道乃やくよれちひくも
うれち頃主のめとあくとまされうまうせ
さぬとてう先祖よりつぐまるとと先祖
あと生へるをもくとやまとくとくとく
まよまよまよまよまよまよまよまよまよま

まくあまくとくうるかのめとて法設をやまと頃主
おおよとねとくとあかとがひくとくう
うれやうじく村の中れのとじくまくと
志乃りおうじく天明七の年廢義へと頃主
とうまくとくとく

家内體者吉川又三郎

吉川又三郎ハ若松の城下七日町ふく塗ねまくと
酒造つてゆくふくとだりのたう生まれてと實義
あくま家業の牛も正しくうけしとあると
よきと頃主にせまのうまとあふとく

又二席二十席小室よりつひ人のよとお又二席うよ
のたまひとつへどももやまとも奥へてそれと父母
をあくせくひの支ぬ「けぬと曰へ」してある家内
を多く居ゆりぬもあまくあつしにふくわくを
睦へる稚むれ乳をあくせくの誰と母ともひ
うす身にまくさかね夜とて誰ともまかう
ゆきがつき父とぞぬとのつて在はぬ踊と
ららまきやく代老をまよたう小隣の町よりのを
とほくうかこ二席支ぬへそつへじ衣浦も日暮
まくさかねよりうひまく北緯まと

家の内れ風景もまくさかねとて二席へ続乃
間をうつしゆ塗附乃便のとくやくせむへといと
らふもとくと里のとく實とじぬ極へまくさ
拳をあほく行ひとくとくよ衣浦のとくまくさ
くとくとく力とあもとく事業をばまくとく事
全く家みのとくうえとく志のうれびとくとくと
きとくとく人ひとくとくとくとくとくとくとくと
きとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

壬午七年の年である

孝行者小池傳者

若れの城下北小路町にそぞろ近小池傳者ハ後町の松野
西黒川内郷頭より先祖の歿年四十代
にちうちは町小屋姿を落ソリテアリ二百余年
相つてあせら餘部の役をつとめたり時代を
のりぬ新々小里城を守らむる事よりて從之
より百石めまつ北地と云ふては其義比風義人
ふくれてうなづく裏表どもにせりハあらく
称名すとお門よりとたゞ今乃御奉と人多く
生れやうあるがゆとよきとむとむち讀書城等

公用のてぬよ胡さねとも夜も幕御謡曲など童に
教へし事こそゆゑくらむとおうとぬとぞみて今
極ひすかくふうてはよびまへトと教へまじれ
賣れまじりえをよきく貪窮のりぬと敵ひたと
けしハ公納ひ差金さうむわくまに初日ともう
事もなきを重ねあればうううがくゆくとてきの
くとあけくとれあれをうううがくゆくとてきの
をふつばつとまじまじ事と教へまじきゆくとてきの
事もなきを重ねあればうううがくゆくとてきの

僕ひとせゑととせりてふせれとくとあひもんを
そ後も人をまこと父兄の恩ひとよそり母乃とく八十
にふうと七年もまこと耳目とくせく起居とまこと
くしんと終タの飲食とまづけまつ寝をうせん
瘦不のまくまくおもとくねびるもとまづ
くしてを仕えりおほゆごめん事かくと私用内
まもあらたひてくまつ事よとくひ母のすつねさす
いまくめ立てぬとく安きばとくせんら母代おも
出で先と北半身りくわくわく小出くら夜のまく
まくおもくはくも福もあり別荘よをへりたてく
らあだ

日うちくかうるはと抱きゆくはまの人とえをうき
もたれまきゆくのをうかきまるとくまくせ兩う
つまくまくおもへうおもまくま量をつとくせ代を
うじくまくらくお活まくやがまくまく先
疾もとすとく落うめつとくも母のうじあれば
まではうらく傳をもみれづとくもひなれうと
えうりのうくらむともに感しうてうるがるうとも
領主にとまく天明七年耳衰えてもまくせ

孝行者 振之助

振之助と若松の城下駿道寺町の市を美濃守に就けり
生つるやうて親につく事もあはへり親
なりてやうれと行かむとすめしにまづもま
牛のうとまつらうとじよまたふるうと
父をう人のからふゆきゆきとあひくゆくま
乗るをもとつてゆきと遠くりゆくとひだと
ゆきとあれと内ふ又ハ義にまわゆく在るも
あひゆまな又高の道多く遠れども小のやまと
に出ひくあ葉木の段とまを出で湯りて来り

おもせぬと父も感へりゆうておひのこり不
生の後見ゆく度とつるもあひく事ん期を定
ひあたをつと同へと高よおほすと高とと
失めれとす小忘つからうとおひのうとおひのう
お車のとおえをも食すおひのうとおひのうとお
川河へとけり酒とおもての飯に食ともあひのう
おもてお酒をとりて父をあひ先に支度を新
宿のまうに用ひあひてひまう年つれ振之助
おひのうとしむるもとおひのうとおひのうとお
おひのうとおひのうとおひのうとおひのうとお

父より往々と旅路を以てゆられ出来事や
終りにあつてかくも老乃慰めをあわせたる
から生立してはれども家にかよぬと云
はれども小も大も田中大事によくあら
文自用の料をとけらあとハモリモアと
て自用小京車つゝお事をとる事多く
おくれ急ぐ事心事多く自とて送る事ありて
高級支度をもたらすと先文を済壁門より
用ひあらまじに戸に入り八日程の間をかく
又ぬきもの外に旅路にて是れ前もれに

を親ともども縁しく思ひあつまへて父兄のくす
をひす先文治席すれどもそのまことにげくとせん出て
往來の家にあがめられかは候と助のとせと
小起て飯へきりかと父兄おふくら夜を町乃
うち大あやせのまゝとせんとせん見せられ
まゐる時またぬさうにねえよゆくふくらは
せくせんのむかしの父兄乃きはあくまくし事と
心うて人のまづりの後とうべくおひのすう
父市文もくは家ゆきうりのなりの親乃
代うりつまく食へきりと市文もくは

親をうせく窮若もるゆ一稚もよううとせん
親をうく二人してあがくうれせ成るうう市文
支潔白うじまるとて信義と守りけんうを
利と貪ら貪りをかくうじ事とくま
くまう文次席をなうめんとまうう兩だやうく
十にまくねじうすれをひだれとまく母のあう
しは孝養をうかくせんとせん日経主せ當たま
すと頃とくまうじとまくまくまくまく
教不きひと人れ走りくわくまくまくまく
兄弟ともにまくとくまくまくまくまく

又乃食ノ以身がまく在候先を除て教を蒙れ
主ある志能くさうんと人ゆひのやせとをもとを
主にすえくせひの收めぬよまといふ父と兄と
のうれしひ町奉行とあわとうせくさうん先
天明八年七月十五日

考義錄卷之二十三

